

日本語学校教育研究大会 実践ちょっと見—1

「With コロナの時代」を生きるための授業実践

—今だからできる、学習者の内面に迫る試み— の参加報告

発表者：インターカルト日本語学校 萩原秀樹氏

### 1. 実践の背景

コロナ禍で授業に ICT を取り入れざるを得ず、技術面は大きく変化したが、授業の中身はどうなのか。従来の授業内容の踏襲や一部見直しで済ませているのではないかという疑問・不安・反省から、学習者の内面に迫る試みを実施することにした。

### 2. 実践概要

目的：コロナ禍を通じて学習者が社会的視点の広がりや内面の掘り下げを進め、今後の社会とのかかわりや生き方とその手がかりを探ること。

特に、この世界規模の災禍に直面する現在、学習者が日本で新たな視座を獲得するきっかけになり、将来への希望をもつことを目的とした。

時期：2020年7月～9月（対面授業再開時）

対象：中級・中上級・上級学生

授業：全9回 各回40分～60分

導入 2回 コロナの定義、メディアの伝え方、コロナ禍に際して考えること等

展開 3回 自分の中で変わったこと等（内面の掘り下げ）、  
コロナ禍で見えてきたこと等（社会的視点）、  
コロナ禍のメリット等（視点の転換）

発展 4回 中傷ビラ等差別全般、GoTo キャンペーン等矛盾と葛藤  
芸術の機会の減少等芸術の在り方

留意点：データや事実を客観的に伝える。恐怖心や不安をあおらないようにする。

具体例を通して他人事ではなく自分事として捉えるようにする。

話題の多様性と視点の多角性を意識する。

### 3. 実践結果と考察

学習者それぞれの「コロナ観」は浮かび上がったものの、目覚ましい意識の変化等は見られず、学習者の普段の姿勢が投影された感がある。

一方で「発展」の時間には、コロナ禍の社会的・個人的側面を重ねて意見表明する学生がおり、関心の高さがうかがえた。

### 4. 反省と課題、展望

教師側がコロナ禍にこだわり過ぎず、幅広い視点から柔軟に取り組むこと、他の自然災害とリンクさせる等、汎用性があり学習者に身近なものを提示することがあげられる。

【所感】

- ・上級クラスに導入できる内容で、現在起こっている事象についてお互いが意見交換できる場の設定は必要であると感じた。「コロナ禍で自殺が増えた」というテーマが学生の興味を引いたとの話があり、自分事・同世代の問題と捉える視点へ学生を導く取り組みである。
- ・大学院進学クラスで「コロナは社会にどのような変容をもたらしたか」の題材でプレゼンテーションを行った事例も紹介され、日本語の運用力だけでなく、主体的に考えそれを主張するという発信力の向上にも寄与できる内容である。
- ・一方で、「決められたカリキュラムのどの部分を代替したのか」「評価はどのように行ったのか」など、日本語学校の教育の枠組みに取り入れることに不安を感じている教師がおられることが気にかかった。また、この授業に取り組む際、学校全体として話し合いを持ったかという質問に対しては、他の教師は参加せず自分一人で行ったとの回答で、カリキュラムの制約が課題として存在することを感じた。
- ・2日目午前の対談で、「Less is More」、多くを浅く教えるより少ない量を深く教えるほうが教育効果が得られる、との指摘があったが、学習者の社会に対する意識を喚起させ、学習者中心で授業を進める醍醐味は萩原氏のこの取り組みで発揮できると感じた。学生が日本で新たな視座を得られるよう、学生のモチベーションとイニシアティブを高めていく方策を探っていきたいと思う。（北内直子）